

■表：「無料貸本屋」から「ソーシャルインベーション」へ

第1世代	戦前の理念を引きずり、権威的で市民の支持からはかけ離れた図書館運営に終始。
第2世代	日本図書館協会の「中小レポート」(1963年)、「市民の図書館」(1970年)の普及で一般化した図書館のモデル。90年代後半に「無料貸本屋」論争を巻き起こすなど、時代の変化のなかで役割を終えつつあるともいわれる。
第3世代	資料の貸し出し数よりも、空間のつくりを重視する滞在型の図書館。のちに図書館を集客装置と見なす、俗に「ツタヤ図書館」と呼ばれる事例が登場し、賛否両論を引き起こした。
第4世代	第2世代および第3世代への移行の反省から、図書館そのものの機能を生かし、まちづくりの核施設として位置づける図書館。課題解決型図書館ともいわれる。
第5世代	図書館の運営そのものが、ヒト・モノ・コトの交流と人材育成、雇用創出をもたらす、地域経済を循環させるソーシャルインベーションを起こす。

ところが1990年代後半くらいから、これら第2世代の図書館に対し「無料貸本屋」論争とも呼ばれるような疑問が呈されるようになりまし。たとえば、ひとつの図書館で『ハリー・ポッター』を数十冊も購入し、それでも予約した人は2年待ちというような極端な話が出てきたのです。市民の要望には、確かに応えているのかもしれない。

「つなぐ」機能を生かした
新世代の図書館像

実は、日本にある図書館の多くが今もこのタイプです。私はこれを「第2世代」の図書館と呼んでいます。戦後最初にGHQ指導下でつくられながら定着しなかった「第1世代」の図書館に対し、貸し出し数を競いながら市民に近づいていった、これら第2世代の図書館にも、もちろん評価できる部分は大いにあるでしょう(表)。

たくさんできてしまいました。



新世代図書館が ヒト・モノ・コトの 結びつきを取り戻す

今、日本各地で公共図書館を新たな「ハブ」とした、地域の再活性化がさまざまな形で進められている。従来の、本を並べ、貸し出すだけの図書館から、ソーシャルインベーションを目指す新世代の図書館へ。そこでは何が変わり、何が生まれようとしているのか？ 自らも日本全国で企画・運営にたずさわる太田剛さんに、進化する図書館の“現場力”についてうかがった。

インタビュー

[図書館と地域をむすぶ協議会チーフディレクター]

太田剛 Ota Tsuyoshi

協坂敦史=取材・執筆 栗原論=撮影

戦後の図書館は
どのように生まれたか？

本はヒト・モノ・コトをつなぐ存在です。著者と読者だけではありません。さまざまな形でヒトとヒトをつなぎ、ヒトとモノやコトをつなぐ。さらにモノとモノ、コトとコトもつなぎます。本は、あらゆる組み合わせで異なるものを結びつけ、出会いを生むことができる力をもっている。だから図書館というのは、そういう無限のつながりが生まれる可能性をもった場所なのだと思います。

ところが日本では、多くの図書館が既成概念に縛られ、時代に取り残された退屈な場所になっているように思えます。なぜなのでしょう？ 歴史を振り返ってみると、戦後日本では図書館がGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)指導のもとで始まったからといえるでしょう。CIE(民間情報教育局)が各地にアメリカ式の図書館をつくり、日本の官僚も熱心に討議を重ね、なんとか図書館法の成立まで漕ぎつけますが、なかなか実態は伴わなかったようです。

これに対して、現在の私たちになじみ深い図書館のあり方に大きな影響を与えたのが、1963年に出された「中小都市における公共図書館の運営」(通称「中小レポート」)、さらには1970年の「市民の図書館」という2つの指針でした。これらの影響を受ける形で定着したのが、「とにかく貸し出し数を増やそう」「あらゆる場所に図書館サービスを届けよう」という考え方です。移動図書館を充実させ、児童書に力を入れたのが、その大きな特徴といえますが、結果として小説などのベストセラーや、市民が読みたがる流行本を大量に購入し、「安易な読書推進」に走る図書館が

いけれど、それでは図書館が無料の貸本屋でしかないのではないかと？

こういう批判のなかで新しく注目されてきたのが、いわゆる「滞在型」の図書館で、それを「第3世代」の図書館だと私は考えています。要は、本の貸し出し数よりも、多くの人がゆっくり時間を過ごすことを意図した図書館です。快適な閲覧席はもとより、居心地のよいカフェが併設されていたり、他の文化施設(美術館や郷土資料館など)や商業施設(ショッピングセンターや駅ビルなど)との組み合わせだったり、ゆったりと過ごしてもらえるような配慮がなされるようになりました。

2016年開館の『大和市立図書館(文化創造拠点シリウス)』や、2017年開館の『土浦市立図書館(アルカス土浦)』などは、その流れといえるでしょう。しかし、この第3世代にも問題がな。いわけではありません。たとえば2012年にカルチュア・コンビニエンス・クラブが佐賀県の『武雄市図書館』で指定管理者「*1」となり、県内初のスターバックスを併設して話題となりました。しかし、確かに多くの人が来てお茶を飲んでいるけれど、ほとんど本を読んでいる。図書館をただの集客装置としか見ていないのではないのか？ また、グループ企業から無駄な蔵書を大量購入したり、CD、DVDのレンタル店を併設する一方で、貴重な郷土資料を大量に廃棄するなど、不透明で不適切な運営にも批判が集まりました。

私たち「図書館と地域をむすぶ協議会(略称「図&地協」)」が活動を開始したのは、このように図書館が大きな変革期を迎えている最中で、未来の図書館を構想しつつ、図書館が本来もっている存在意義を忘れるべきではない——と主張しました。その頃から、本や図書館がもっている「つなぐ」

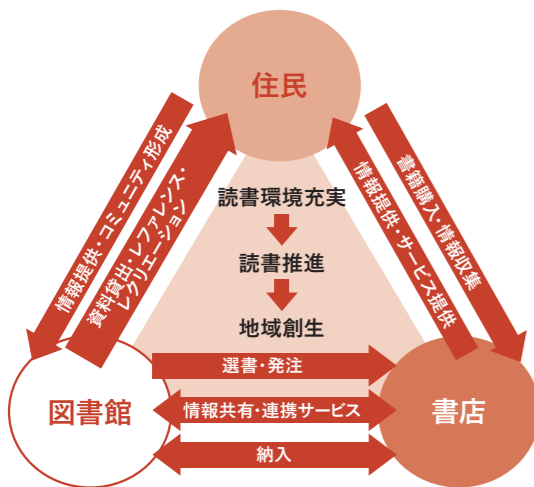
自由に本を購入し、
自由に書棚をつくることから

では、ソーシャルインベーションを起こすため

機能を最大限に生かすことで、地域づくりの核となって、課題解決に積極的に取り組む「第4世代」図書館が注目されます。2015年開館の『岐阜市立中央図書館(みんなの森ぎふメディアコスモス)』などがそうですが、佐賀県の『伊万里市民図書館』や、長野県の『小布施町立図書館まちとしょテラソ』*2などは、市民が図書館の設立や運営に積極的に参加した事例として有名です。私たちが、さらに次のステップとして指向しているのは、図書館の運営そのものがヒト・モノ・コトの新しい「つながり」を創出し、地域の人材育成や雇用創出をもたらす、そこに地域経済を循環させるような新しい「ソーシャルインベーション」を巻き起こしていく図書館——それが「第5世代」図書館という位置づけです。

ひとつ口に第4世代から第5世代へといっても、地域づくりの拠点としてソーシャルインベーションを起こしていくには、ただハードを変えるだけでは不十分で、図書館のソフトすべて、それこそ本や資料の選び方から調達方法まで、ネット対応やデジタル化戦略なども含めて、運用の仕組みそのものを見直し、日々の現場から変革を起こす必要があります。その際に欠かせないのが、既成概念を突破する「図書館の自由」であり、多様なセクターと関係性を結ぶ「図書館の信頼」であるはずです。少子高齢化が進み、地方自治体が疲弊する時代、地域がレジリエンス(回復力・復元力)をもつために、図書館ができることは決して少なくないと考えています。

■図1：図書館と地域がつながる
第5世代図書館のあり方



それなら、その「装備」作業を地元の福祉施設に委託したらどうだろう？ この試みは、非常にうまくいきました。多くの福祉施設では入所者にパソコン講習はじめ、いろいろな職業訓練をしています。一方、図書館の本の「装備」なら、毎月一定の仕事をお願いすることができると。幕別町では、この「装備」作業を通じて社会とのつながりに自信をもった2人の方が、一般企業に就職できました。これは、税金に悩む小さな町にとっては実に大きなことです。もちろん地元の書店も潤いますが、何より図書館を核にした書店と福祉施設の新しい関係が、小さな経済循環をつくっているのが大事です。近年は、地元の本屋がない自治体も増えていますが、それでも、既存の「道の駅」を通して蔵書を購入したり、ブックカフェをやりたい若者がいれば積極的に手を組むなど、方法はいくらでもあります。そのように人材を育て、雇用を生むことで地域が経済的にも活性化します。それがソーシャル



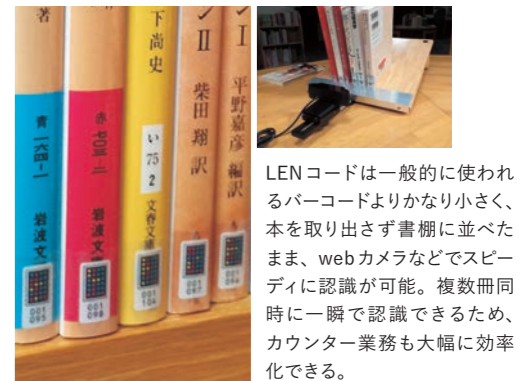
地元の公的福祉施設への委託によって行われる、幕別町図書館の書籍資料の装備作業(上)。同館に設置されたストレス測定器。測定を通じて司書による対話と本の紹介に結びつき、地域の課題解決のヒントにつながることもある(左)。

イノベーションを生み出す場としての第5世代の図書館のあり方だと思えます(図1)。
ストレス測定器が生んだ新たなつながり
幕別町図書館では、定期的に落語会を開いています。これは、私たち「図&地協」と落語芸術協会、疲労科学研究所が組んで提供しているモデルで、町民が図書館に足を運ぶ機会を増やし、同時に図書館に設置した「ストレス測定器」に触れてもらうのが目的。
この「ストレス測定器」に指を入れると、脈波(PPG)・心電波(ECG)が同時に測定でき、自律神経のバランスや自律神経機能年齢を表示してくれます。測定結果により図書館では、たとえばストレス状態が「黄(注意)」のお年寄りには、可愛い猫の写真集や、疲労回復に効く体操の本を薦める……そして、その本を返しに来てくれたときに、また測ってみましょうというわけです。ス

ストレスの状態を知ってコントロールすることは、予防医学の見地から非常に重要であることがわかっており、また「笑い」がストレス解消に有効なこともわかっています。
さらに面白いことに、測定で「青(正常)」という結果が出たのに、逆に「そんなことはねえだろ、実はウチの嫁が……」と打ち明けてくれるお年寄りがいたりする。そうした声のなかに地域の課題が潜んでいて、今までの図書館カウンターでは絶対になかったコミュニケーションから、課題解決の種が芽生えつつあります。
こうした活動を通し、ほんの数%であっても病気の予防ができたとしたら、あるいは社会的な問題解決の糸口がつかめたとしたら、どうでしょうか？ 医療費をはじめとする社会保障費において、図書館の蔵書購入予算などは比べることができないほど、大きな削減効果があるはず。それとともに、KPI(重要業績評価指標)をきちんと設定することで、幕別町図書館では、これまで図書館を受け皿として採択されるのが難しいとされてきた地方創生交付金などの予算も獲得できるようになりました。
昨年は幕別町図書館の落語会に前座として何度も来てくれた若い落語家さんが、令和初の二ツ目昇進してお披露目しました。町の人たちに可愛がられて、育てられた落語家さんが、出世して有名になっていく。そんな新たなつながりが生まれてきているのを見るにつけ、ほんの少しやり方を変えるだけで、図書館にはまだまだ新しい関係を生み出して、地域の価値を高める可能性があると感じています。



春、一面のタンポポに囲まれた幕別町図書館(上)。館内は、いたるところに特集棚が配置され、森村誠一氏、福原義春氏ら著名人が読み終わった本を預けてくれている「北の本箱」は特に人気の的だ(下)。写真提供/太田剛(以下すべて)



LENコードは一般的に使われるバーコードよりかなり小さく、本を取り出さず書棚に並べたまま、webカメラなどでスピーディに認識が可能。複数冊同時に一瞬で認識できるため、カウンター業務も大幅に効率化できる。

には、まず何が必要か？ それは、何よりも図書館が本来果たすべき役割、運用そのものに自由を取り戻すということです。
公共図書館について規定した「図書館法」によれば、図書館の機能は必ずしも「本を貸し出す」ことだけではありません。「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資する」。つまり、地域の人の①教養を担保し、②調査研究や③レクリエーションを支援するのが図書館の役割です。でも残念ながら、この3つをちゃんとやっているといえる図書館は少ないでしょう。逆にいえば、それを本気でやるだけで図書館は劇的に変わってくるはず。図書館の中心にあるのは、もちろん書棚です。そこに本を並べることが図書館の基本にあるわけですが、現状はそこに「自由」の発想がない。具体的には、すべての本が「日本十進分類法(NDC)」で分類・管理され、全国どこの図書館も同

じような配列で、同じ項目の棚では、著者名の「あいうえお順」で並んでいたります。そもそも今どき、NDCの硬い分類のひとつだけにおさまるような単純な本は、専門書でない限りほとんど出版されないでしょう。また、NDCは既知の本を探すためには合理的ですが、未知の本と出会うためには役に立ちません。このインターネット時代に、住民の教養を担保するには、新しい知との出会いが重要ではないでしょうか？ それぞれの図書館が工夫して、利用者の興味や好奇心を触発する自由な分類や配架を考えてもいいはず。私たちが2013年からお手伝いしている北海道十勝の『幕別町図書館』では、物流で注目されていたカメラレオンコードを図書館用に規格化した「LENコード」*3と、自治体で使われていたChange Magicという文書管理システムを図書館用に改良して導入しました。これにより、貸し出しや返却処理が格段に楽になり、以前は1週間以上休館していた蔵書点検の時間が大幅に短縮

し、さらに既存の図書館システムでは困難だったNDCにとられない本棚構成や、特集棚や企画棚の自由な編集がいつでも可能になりました。こうして、日常の資料管理業務の負担を軽くしながら、本棚の編集力を高めることで、テーマごとの特集棚——たとえば「ストレス」をテーマにした棚に、医学関係の本とストレス解消のための落語の本と一緒に並べるなど——が自在に組めるようになる。選書や配架はもちろん、ネットを通じての本の紹介など、司書が本来担うべきさまざまなスキルが存分に発揮されるようになったのです。これまで画一的でつまらなかった図書館の棚が、眺めているだけでワクワクするエンターテインメント装置に変わる。それだけで、図書館空間の魅力は増し、人が集まる図書館への第一歩を踏み出すことができます。
もうひとつ大きな改革に挑んだのは、本を地元の書店から購入することです。実は現在、多くの公共図書館では東京の大手専門業者から蔵書を調達するのが当たり前になっています。それを見直しました。たとえば、幕別町図書館の場合は年間700万円ほどの資料購入予算があり、これを地元の書店からすべて買うと、店側の利益が140万円ほどになります。1冊あたりの利幅が少ない書店にとって、この金額は小さくありません。これまで、それができなかったのは、本にラベルを貼付したり、フィルムで包んだりする「装備」作業の問題があったからです。全国規模で大量の本をさばく大手専門業者は、この「装備」を無料で提供することで競争力を保持できます。地元の小さな書店には、とても太刀打ちできません。地方の図書館にとっては、地元から本を購入するという自由もままならなかったわけです。



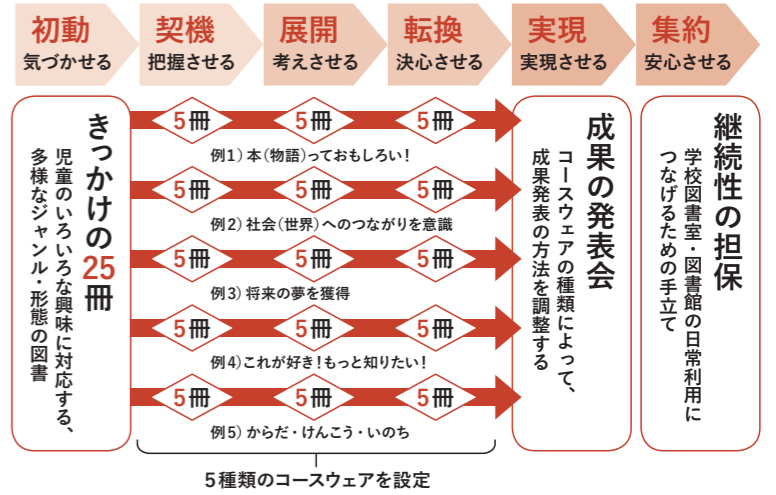
開かれた図書館のためには、これを支える地元の人々のサポートが不可欠。幕別町図書館の「まぶさ(まくべつBOOKサポーター)」には、ボランティアとして地元新聞記者から教職員まで多様な人材が顔をそろえる。



「図&地協」がソフト面をコーディネートし(建築設計は隈研吾氏)、2018年に開館した高知県の『榑原(ゆすはら)町立図書館』。地元の木材をふんだんに活用した同館は「雲の上の図書館」と呼ばれ、デイケアやショートステイのできる複合福祉施設と隣接している。図書資料は高知県内の書店から納入し、「地元でできることは地元でやる」持続可能な地域づくりを目指している。

■図2: 那智勝浦町立図書館の「本のコースウェア」

選書とコースウェア (100冊のモデル本を選書)



「本の処方」がノックした心の扉

近年は、情報収集などを通じて、比較的小規模なビジネスや起業の手伝いを図書館が担う「ビジネス・レファレンス」も各地で盛んになっていきます。確かに、それは重要な役割ですし、成果もわかりやすい。しかし、その一方で、特に地方の小さな自治体の図書館では、もっと身近な視線で本を選び、長い目で人と本をつないでいくニーズに注目してもいいのではないのでしょうか。

たとえば「考える図書館」をコンセプトに、私たちがシステム改修やリニューアルのお手伝いを

の自由をどう守るか? 人種差別やLGBT差別をどう考えるか? さまざまな問題が、図書館のなかで徹底的に議論されているんですね。

その点で日本の図書館は、まだまだ成熟していない気がします。図書館自体の地位が非常に低く、行政との距離も遠い。何より、司書の給与が驚くほど低いことが大きな課題です。一方、司書の質的な地位向上のためには、資格取得に必要な教育の中身も変えていかなければなりません。本に関わる仕事をする以上、せめて書籍の出版や流通の仕組みや、最低限の行政の予算の動きや、地域経済の仕組みは教えるべきでしょう。

こういう状況のなか、それでも図書館からソーシャルイノベーションを起こして地域を活性化させるためには、どうしたらよいのか? そのためには、図書館を「開いていく」しかないと思はれています。

「開かれた図書館」という言葉でイメージするのは、ふつう誰もが利用することのできる親しみやすい図書館でしょう。しかし、「利用者」に対してオープンなだけでは不十分で、これからの図書館は運営そのものを開いていかなければなりません。

たとえば、いろいろな図書館を巡っていると、理数系の本をうまく選書できる司書が圧倒的に少ないことに気付かれます。これは、理系の学生が司書の資格を取るの、いろいろな意味で難しいという理由もあるのでしょう。理系に限らず、専門性の高い知識をもった人材が少ないことが、結果として多くの図書館の蔵書が児童書や小説ばかりになる原因にもなっていると思います。

でも、どの地域でも中学校や高校の先生など、理系の本に詳しい人は必ずいるでしょう。医療分野の選書なら、地域の病院にアイデアをもらっ

している和歌山県の『那智勝浦町立図書館』では、文部科学省の教育格差解消に関する事業に採択され、5種類のテーマで「本のコースウェア」をつくり、学校に行きづらくなってしまった子どもに社会とのつながりを取り戻す試みを教育委員会と連携して行いました(図2)。各地で読書推進運動が盛んですが、私は読書が「目的」になってはいけなと思っています。読書はあくまでも手段や方法であり、本をたくさん読むことではなく、目的に合った本を探す手伝いをする。そんな視点から、学校支援員やソーシャルワーカーと組んで、不登校の子どもの家に本を届けます。そのうえで本人や家族から、どの本を手にしたか、どの本に興味をもったかなどのフィードバックを受けて、コースウェアを設定していく。

そのなかに、複雑な家庭環境のため、小さなときから引きこもりの子どもがいました。ソーシャルワーカーさんが半年間、家に通って本を届けても、会話どころか、かぶった毛布から一度も出てきてくれない。母親に聞けば「夜になると、本を手に入れているようだけども…」という心もとない回答。それでも諦めず通い続け、あるとき、興味をもってもらえればと、電子図書館が利用できるタブレット端末をもっていったのだそうです。

そのとき、ソーシャルワーカーの女性が端末の操作に戸惑っていると、かぶった毛布から、その子の指が1本伸びてきて手伝ってくれた! 置いていったタブレット端末でその子が喜んで読んだのは、意外にも「おさるのジョージ」の多言語版でした。聞いたことのない外国語の響きで聞くのがとても面白かったというのです。こういう、半年でやっと指が1本出るような、遅々として進まない反応でも、一度扉が開くと驚くような成果が

太田剛
おわた・つよし

図書館と地域をむすぶ協議会チーフディレクター。編集工学機動隊GEAR代表。1965年、和歌山県生まれ。茨城県潮来市で育つ。高校理科教員等を経て、1990年に編集工学研究所(松岡正剛所長)に入社。編集工学を応用した各種メディア制作から地域活性化まで、幅広いプロジェクトを統括。2012年に独立し現職。

- 注**
- *1 指定管理者は、地方公共団体が公の施設の管理を行わせるために、期間を定めて指定する団体。2003年の地方自治法改正により、株式会社をはじめとする営利企業などによる代行も認められるようになった。
 - *2 伊万里市民図書館は350人のサポーターと十数のボランティア団体の参加により、市民主体で運営。小布施町立図書館まちとよテラスは、設立の計画段階から市民が参加したことで話題となった。
 - *3 Ushay Editorial Navigationの略。小さな2次元カラーコードを本の背表紙に貼ることで、書架に並べたままカメラで認識が可能。10〜20冊程度を一度に認識できるため、貸出・返却や蔵書管理が飛躍的に効率化できる。

図書館を「開いていく」しかない

昨年、『ニューヨーク公共図書館 エクス・リプリス』という映画が話題になりました。「世界一の知の殿堂」とも呼ばれるこの図書館は、ニューヨーク市の予算も使われているとはいえ、財源の多くを寄付でまかなっています。だから、日本の公共図書館とは仕組みも違うし、単純に比較することはできないと思います。

この映画の感想を日本の図書館関係者に聞くと、図書館で行われている活動自体は日本と基本的に変わらないという反応が少なくありませんでした。けれども、図書館の現場で交わされている言葉——知の深さや広さ、言葉の量の圧倒的な違いに、私は愕然としました。図書館は予算を得ているニューヨーク市の意向に沿うべきか? 図書館